

第 47 章

4 ニーファイ

はじめに

第四ニーファイでは、イエス・キリストがアメリカ大陸を訪れた後に 200 年近く続いた一致と協調について述べられている。民は「皆……主に帰依し」(4 ニーファイ 1:2)、その結果あらゆる時代の人々が夢に見てきた社会が確立された。十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は次のように述べている。キリストの訪れの後、「主の壮大な教えと人々を高めてやまない主の御霊が民を史上最も幸福な状態へと導きました。こうあります。『彼らの中にはまったく争いがなく、論争もなく、皆、互いに公正に振舞った。また、彼らはすべてのものを共有したので、物持ちも貧しい者も、束縛された者も自由な者もなく、皆自由となり、天の賜物にあずかる者となった。』」[4 ニーファイ 1:2-3] 思うにこうした祝福された状態で分かっているものは、ほかに一つしかありません。エノクの町です。こうあります。『彼らが心をつにし、思いをつにし、義のうちに住んだからである。そして、彼らの中に貧しい者はいなかった。』[モーセ 7:18]」(『聖徒の道』1996 年 7 月号, 36)

悲しいことに、第四ニーファイの後半では、義にかなった幸福な民が自分たちの生活に高慢と背教が入り込むのを許し、最終的に社会が滅亡するに至った様子が明らかにされている。この書を研究しながら、ニーファイ人の社会が享受した幸福をもたらし、彼らの社会に及んだ災いと滅亡をもたらし、そのことを理解するように努める。

注解

4 ニーファイ 1:2 「民は……皆、……主に帰依した」

• 大管長会のマリオン・G・ロムニー管長 (1897 - 1988 年) は、真の改心の意味について次のように教えている。

「ウェブスター〔辞書〕には、“convert” [『帰依する』、『改心する』] という動詞は『一つの信仰や道から別の信仰や道に転じること』を意味すると述べられています。また“conversion” [『改宗』、『改心』] とは『霊的、道徳的な変化』だとあります。聖文の中で用いられる場合、“converted” [『帰依した』、『改心した』] とは一般にイエスとイエスの教えを単に心の中で受け入れることだけを意味するものではありません。イエスとイエスの福音に対して、力の源となるような信仰を持つことなのです。それは変化を生じる信仰であり、人生の意義に対する理解に、神に対する忠誠に、関心と思いと行いに、実際に変化をもたらし信仰なのです。……

完全に改心した人は、イエス・キリストの福音に反する事柄を実際に望まなくなり、その結果、それに代わって神の愛と、神の戒めを守ろうという確固とした決意を抱き、そのよう

な決意に従って生活します。……

……このことから考えると、教会の会員であることと改心することとは、必ずしも同じではないようです。また、……



『改心した』ということと、証あかしを持っているということも、必ずしも同じではありません。証は、熱心に求める人に対して聖霊が真理の確証をお与えになるときにもたらされます。行動を促す強い証は、信仰を生きたものとします。つまり、そのような証が悔い改

めに導き、戒めに対する従順さを招くのです。一方、改心とは、悔い改めと従順の実であり、報酬です。」(Conference Report, 1963 年 10 月, 23 - 24)

4 ニーファイ 1:2 「彼らの中にはまったく争いがなく、論争もなく」

• 教会員がほかの人とどのように接するべきかについて、主は次のことを明らかにしておられる。「すべての者はその隣人の益を図るように努め、また神の栄光にひたすら目を向けてすべてのことをなすようにしなければならない。」(教義と聖約 82:19)

• 今日こんにちの世で、何の争いも論争もない社会を築くには何が必要だろうか。スペンサー・W・キンボール大管長 (1895 - 1985 年) は、どうすればこの目標を達成できるかについて次のように教えている。

「第 1 に、わたしたちは魂を迷わせ、心を委縮させ、思いを暗くする自己本位な考え方を捨てなければなりません。……

第 2 に、わたしたちは完全な協力体制を敷き、互いに調和を保って働かなければなりません。……

第 3 に、わたしたちは祭壇を築いて、主によって求められるものは何でも犠牲としてささげなければなりません。まず『打ち砕かれた心と悔いる霊』[3 ニーファイ 9:20] をささげることから始めます。」(『聖徒の道』1978 年 10 月号, 129 - 130 参照)

4 ニーファイ 1:1 - 4, 16 - 17
改心した民に見られる特質を挙げる。

4 ニーファイ 1:2 「皆……公正に振る舞った」

・七十人のシェルドン・F・チャイルド長老は、正直と高潔についての話の中で、互いに「公正に振る舞う」とはどのような意味であるかについて次のように説明している。

「何かを行うと言ったら、それを実行します。

約束をしたら、それを貴びます。

召しを受けたら、それを果たします。

何かを借りたら、それを返します。

負債があれば、それを返済します。

取り決めに結んだら、それを守ります。」(『聖徒の道』1997 年 7 月号, 34 - 35)

・大管長会の N・エルドン・タナー管長 (1898 - 1982 年) は、ほかの人に公正に振る舞うことの大切さについて次のように説明している。

「最近、ある青年がやって来てこう言いました。『ある人に毎年一定のお金を支払うという約束をしました。でも今、生活が苦しくて支払いができません。支払えば、家を失います。どうしたらいいでしょう。』

わたしはその青年を見て『約束を守りなさい』と言いました。

『家がなくなってもですか。』

わたしは言いました。『家のことについては何も言っていない。あなたの約束について話しているのです。あなたの奥さんも、家はあっても取り決めや聖約を守らない夫と住むよりは、借家に住むことになっても約束を守[る]……夫を望んでいると思いますよ。』」(Conference Report, 1966 年 10 月, 99)

4 ニーファイ 1:3 「彼らはすべてのものを共有した」

・ニーファイの民を際立たせた特質の一つは、「彼らはすべてのものを共有した」ことであった(4 ニーファイ 1:3)。マリオン・G・ロムニー管長は、この箇所が何を意味し、それがどのような方法で行われたかについて、次のように述べている。

「この方法〔共同制度〕では、各自が自分の財産を私有し管理する権利を維持しました。……各自が自分の取り分を所有し、それを自由に譲渡、維持、利用するなど、自分のものとして扱うことができました。……

……各自は自分自身の家族の必要と望みを満たす以上に生じた剰余分を教会に奉獻しました。この剰余分は倉に納

められ、その一部を管理する責任がほかの人に与えられ、貧しい者の必要が満たされました。」(『聖徒の道』1977 年 10 月号, 530 参照)

ロムニー管長はまた、民をそのような生活へと導くものについて次のように説明している。「わたしたちが『キリストの純粋な愛』を持てる状態になると、人に仕えたいという望みが高められ、奉獻の律法に完全に従って生活しようという気持ちになるでしょう。奉獻の律法に従って生活すれば、貧しい者は高められ、富める者はへりくだった心を持つようになります。そしてその過程において、双方が聖められるのです。貧しい人々は、貧困という不名誉な制約や束縛から解放され、自由な者となって、物質的にも霊的にも自らの持つ可能性を発揮できるようになります。富める人々は、奉獻の律法に従って剰余の財産を貧しい人々に分かちことにより、しかも強要されてではなく、自由意志に基づき自ら進んでそれを行うことにより、モルモンが『キリストの純粋な愛』と定義したその愛を同胞に示すのです(モロナイ 7:47)。こうして与える者と受ける者が共通の基盤の上に立ち、神の御霊により祝福されるのです。」(『聖徒の道』1982 年 4 月号, 159)



・十二使徒定員会のロバート・D・ヘイルズ長老は、わたしたちがどのようにして奉獻の律法に従う備えをしているかについて次のように説明している。「什分の一の律法は、自分自身の時間、才能、財産のすべてを主の業のためにささげるという、より高度な奉獻の律法を守る備えとなります。このより高度な律法に従うよう求められる日まで、什分の一の律法すなわち毎年収入の 10 分の 1 を惜しみなく納めるという戒めが与えられているのです。」(『リアホナ』2002 年 11 月号, 27)

4 ニーファイ 1:5 「イエスの名」で行われる奇跡

・スペンサー・W・キンボール大管長は、過去と同じように今日にも奇跡が教会の一部であることを次のように説明している。

「今日わたしたちは実際、想像も及ばないほどの奇跡を経験しています。わたしたち自身が生涯に経験するすべての奇跡を記録したなら、それらを記した本を収めるために本棚が幾つも必要になることでしょう。」

どのような奇跡を経験しているのでしょうか。啓示、示現、異言、癒し、特別な導きや指示、悪霊を追い出すことなど、あらゆる種類の奇跡です。それらはどこに記録されているのでしょうか。教会の記録、日記、新聞や雑誌の記事、そして多くの人々の心と記憶の中にです。」(The Teachings of Spencer W. Kimball, エドワード・L・キンボール編 [1982年], 499)



4 ニーファイ 1:13, 15 – 16 「すべての民の中にまったく争いがなく」

・十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老は、4 ニーファイで述べられている大いなる平和をもたらしたものについて、次のように述べている。

「個人の平安はへりくだって神に従い、心から神を愛する人にもたらされるのです。次の聖句によく注意してください。

『民の心の中に宿っていた神の愛のために、地の面にはまったく争いがなかった。』(4 ニーファイ 1:15, 強調付加。1:2 も参照)

このように、わたしたちが目指すのは神への愛です。これは第一の戒めであり、信仰の基です。神とキリストへの愛が育つと、家族や隣人への愛が自然に生まれてきます。そしてわたしたちは、熱心にイエスの模範に従うようになります。主は人々を癒し、慰めを与え、このように教えられました。『平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。』(マタイ 5:9。3 ニーファイ 12:9 も参照)

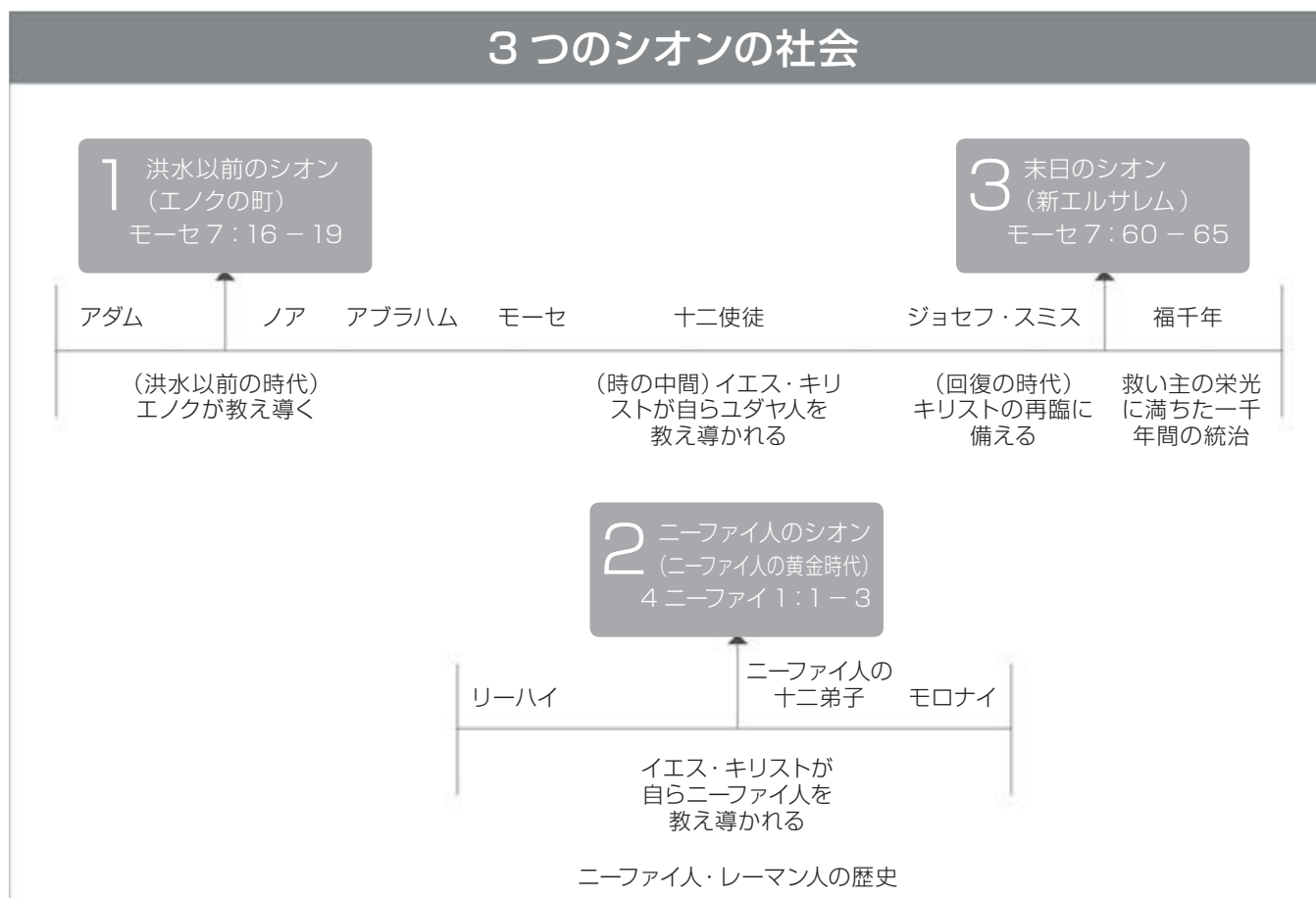
争いというひどい害毒から生じた痛みは、神への愛によって人々の心から消えていきます。この癒しの過程は、一人一人が次のように決意するところから始まります。『この世に平安があるように。そして、それを自分の心の中から広げられるように。』(サイ・ミラー、ジル・ジャクソン, “Let There Be Peace on Earth” [カリフォルニア州ビバリーヒルズ, Jan-Lee Music, 1972年]) この決意が家族や友人の間に広がり、やがては近隣や国全体に平安がもたらされるのです。

争いはやめましょう。主の御心に従おうではありませんか。永遠の真理から光を受けましょう。愛をもって主と心を合わせ、信仰をもって主と一つになりましょう。そうすれば、『人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安』(ピリピ 4:7) が皆さんのものとなり、皆さん自身と、そしてこれから生まれてくる子孫にまで祝福がもたらされるのです。』(『聖徒の道』1989年7月号, 73 参照)

4 ニーファイ 1:15 – 17 シオンの社会

・十二使徒定員会のダリン・H・オックス長老は、4 ニーファイ 1:15 – 17 で述べられている状態をシオンの社会と呼んでいる。これこそ今日わたしたちが到達しようと努めるべき状態である。「復活されたキリストはアメリカ大陸においてになりました。それから後は、数世代にわたり『[民]の中にはまったく争いがなく、論争もなく、皆、互いに公正に振る舞った』と記されています(4 ニーファイ 1:2)。さらに『神の手によって造られたすべての人の中で、彼ら以上に幸せな民は確かにあり得なかった』とも書かれています(1:16)。わたしたちは再びそのような状態になるように努力しなければなりません。現代の啓示も、『シオンは美しさと聖さを増さなければならない』と宣言しています(教義と聖約 82:14)。(『聖徒の道』1987年1月号, 25) (末日のシオンについて、詳しくは312ページにある3 ニーファイ 20:21 – 22; 21:23 – 29 の注解を参照する。)

3つのシオンの社会



4 ニーファイ 1:16 - 17 「何々人とか言われる者」がなかった

• 地の面^{おもて}に一致と平和があったため、モルモン書の中でそれまではレマン人やニーファイ人など異なる集団に分かれていた民は、それぞれ自分たちのこの世の伝統を捨て、自分たちは「一つであり、キリストの子であり、神の王国を受け継ぐ者である」という教義を何よりも優先するものとして受け入れた(4 ニーファイ 1:17)。福音が「あらゆる国民、部族、国語の民、民族」に広まるにつれ、わたしたちが教会として直面する課題の一つが、「一つ」になること、すなわち会員の間で一致することである(モーサヤ 16:1)。非常に多くの人種や文化や伝統が合わされるとき、このことが難しい課題となり得る。

• 大管長会のジェームズ・E・ファウスト管長(1920 - 2007 年)は、文化や人種や伝統が異なっているにもかかわらず一致を築くことができると教えている。

「わたしは、訪問する特権にあずかった各国で、人種や文化の異なる善良な人々に会い、彼らに対して称賛と尊敬、愛の気持ちを抱くようになりました。わたしの経験では、霊性

と信仰において民族や階級による優劣はありません。霊性を欠く人があるとすれば、それは人種や文化、国籍の問題ではなく、救い主が語られた種まきのたとえにあるように『生活の心づかいや富や快楽にふさがれて、実の熟するまでにならない人たち』なのです〔ルカ 8:14〕。……

教会が世界中の国々へ広がるにつれて、教会内の文化的な多様性が増していますが、どこに行っても『信仰の一致』を見いだすことができます〔エペソ 4:13〕。それぞれのグループが主の食卓に特別な賜物^{たまもの}と才能を差し出し、皆、互いに価値あるものを分かち合うことができるのです。しかしわたしたちは個人として、主イエス・キリストの福音に含まれるすべての聖約と儀式、教義を享受しようと進んで求める必要があります。それらはわたしたちを一致と救いに導いてくれるのです。

様々に異なる国民、文化、状況にあって、わたしたちは皆、主の御前^{みまへ}で平等です。」「(『聖徒の道』1995 年 7 月号, 66)

• さらに、十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老は、文化的な慣習、人種的な慣習、またはそのほかの慣習のうち、イエス・キリストの教えに反するものは偉大な幸福の

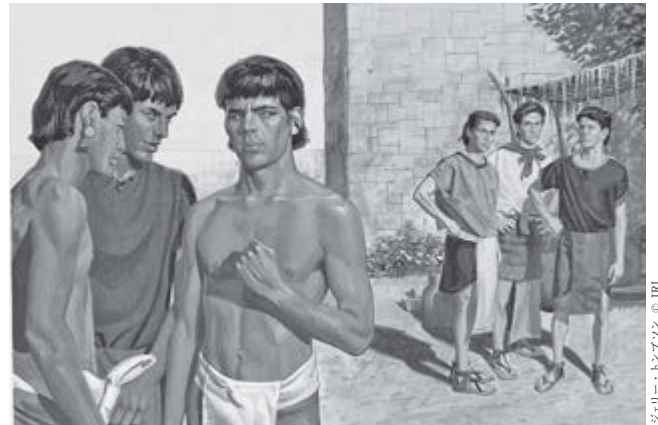
計画を損なうので、そのような習慣は何であろうと捨てるように教会員に勧めている。

「皆さんの天の御父は、皆さんをある特別な血統の下に生まれるように選ばれました。その血統を通して、人種や文化、習慣を受け継いでいます。その血統は豊かな受け継ぎを約束するとともに、大いなる喜びの基となります。しかしながら、皆さんには、そうした受け継ぎの中に、主の幸福の計画に反するがゆえに捨てなければならないものがないかどうかを決める責任がゆだねられているのです。……

わたしは証します。皆さんが優先順位の筆頭にイエス・キリスト教会の会員であるという事実を置き、その教えを人生の基盤とするならば、幸福に至る障壁を取り除き、大いなる平安を見いだすことができるのです。家族や国家の伝統や習慣が神の教えに反するときには、どうぞ、そのような伝統や習慣を捨ててください。伝統や習慣が神の教えと一致しているなら、どうぞ、それを大切にし、その文化や伝統を守り続けてください。皆さんが決して変える必要のない大切な文化的伝統が一つあります。それは、皆さんが天の御父の娘であり息子であることで受け継いでいる文化です。幸福になるために、その大切な受け継ぎによって自分の人生を整えてください。」(『聖徒の道』1998年7月号, 93, 95)

4 ニーファイ 1:20 「再び……レーマン人が存在することになった」

・不和は不義の結果として生じる。次の説明は、高慢こそがすべてのそのような不和の始まりであり、一部の人々が「教会から背いて」自らレーマン人と名乗った理由であると述べている(4 ニーファイ 1:20)。「ある人々にとって自分たちがどのように呼ばれるかが重要だったのはなぜだろうか。レーマン人と呼ばれることがなぜそれほど重要だったのだろうか。なぜこの名前やあの名前で呼ばれるために、一致というたぐいがない特権を捨てることを選んだのだろうか。答えは簡単である。高慢である。人と異なる者でありたいという望み。認められたいという切なる思い。見過ごされることへの恐れ。公衆の注目を浴びたいという渴望。義人は注目されたいという欲求も、称賛を受けたいという望みも、認められたいという気持ちも感じる事が無い。高慢な人は、自分が間違っているときでさえも自分の権利を要求する。高慢な人は、自分の方法が間違っているときでさえもその方法で物事を行わなければならないと感じる。高慢な人は、自分の行く道が広く、滅びに至るものであるときでさえも、自分自身の道を進み続けなければならないと強く主張する。」(ジョセフ・フィールドینگ・マッコンキー、ロバート・L・ミレット、ブレント・L・トップ、*Doctrinal Commentary on the Book of Mormon*, 全4巻〔1987-1992年〕, 第4巻, 204-205)



4 ニーファイ 1:24 「高慢になった」

・モルモン書に記されている歴史の中で、民は義、繁栄、富、高慢、悪、滅亡、謙遜、そして再び義に戻るというサイクルを何度か経験している。高慢のサイクルについては、付録の「義と悪のサイクル」(398 ページ)に詳しい説明と図が掲載されている。

ヒラマン 3:33-34, 36; 4:12 の注解 (252-253 ページ)、およびヒラマン 12:5-6 の注解 (265-266 ページ) を参照する。

4 ニーファイ 1:24-30

これらの節を研究しながら、民が最終的にキリストを否定するに至るまでの過程を見つける。

4 ニーファイ 1:36 「キリストのまことの信者」

・十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老 (1926-2004 年) は、救い主のまことの信者を特徴づける性質について次のように語っている。

「まことの信者は、キリストに対する考えが一貫していません。自分に弱さがあっても、その霊性の中心を救い主に置いています。だから、あらゆることをキリストを中心に考え、しかも、その考え方で首尾一貫しています。

まことの信者は、喜んで王国の義務を果たします。ここで言う義務とは普通は目に見える、分かりやすいものを指しています。例えば、ふさわしい状態で聖餐を頂く、クリスチャンらしい奉仕を行う、聖典を勉強する、祈る、断食をする、儀式を受ける、家族の義務を果たす、什分の一や献金を納める……といったことです。……

まことの信者は謙遜^{けんそん}です。まことの信者は『柔和で心のへりくだった人』で〔す〕〔モロナイ 7:43〕。……すぐにいらだつことはありません。助言を無視することはありません。……

まことの信者は、キリストの望まれることを喜んで行います。……わたしたちは主の導きを喜んで受け入れて、いっそう豊かな経験を積もうとしているのでしょうか。それともしりごみしているのでしょうか。当然ながらわたしたちは、自分の力ではできないと思われるような経験を乗り越えて、成長できるのです。

まことの信者は、バランスの取れた満足感を抱いています。つまり、現状に満足しすぎる思いと、もっと重要な役割を果たしたいという思いとの間に、適切なバランスが取れているのです。……

まことの信者は、真心から祈ります。その祈りは心の思いそのままです。……まことの信者の祈りの中には、時に、まことに靈感を受けた祈りがあることも確かです。

まことの信者は、正しい理由に基づいて正しい行動を取ります。主との関係が完全に確立しているので、だれも見えないところでも、良い行いを続けて行きます。……

まことの信者は、他人の成功を喜びます。……まことの信者は同僚を決してライバルとは考えません。

まことの信者は、赦^{ゆる}しの中には忘れることも含まれる、ということを常に心に留めています。『わたしはもう〔彼らの罪〕を思い起こさない』と言われた、主の模範に従います（教義と聖約 58:42）。……

まことの信者は罪は犯しませんが、罪に対して無知ではありません。心が温かい一方で、率直に物を言います。仲間を心から愛しています。……

まことの信者は幸福です。キリストのまことの信者は、決して惨めな表情はせず、慎重な態度の中にも正しい行いをしたいという熱意を秘めています。どのような生活を送るかという点では、いつも真剣に、しかし、明るく取り組みます。』（『誠の信者』『聖徒の道』1994年12月号、11-14）



4 ニーファイ 1:38 - 39 「彼らは自分の子供たちに信じてはならないと教えた」

• ラッセル・M・ネルソン長老は両親に対して、人にレッテルをはることで、人を相対する二つのグループに分けたり、子供たちの心に偏見を生じさせたりすることのないように勧告している。

「ニーファイ人がほんとうに義にかなった状態にあったとき、相対する二つの民に分かれるというそれまでの構図は消えました。『民の心の中に宿っていた神の愛のために、地^{おもて}の面にはまったく争いがなかった。』〔4 ニーファイ 1:15〕……

残念なことに、その話の続きは喜ばしいものではありません。この好ましい状態が続いた後、『背いて、自らレーマン人と名乗った者たちが少数』現れました〔4 ニーファイ 1:20〕。彼らは昔の偏見をよみがえらせ、『レーマン人が初めからニーファイ人の子孫を憎むことを教えられたように』〔4 ニーファイ 1:39〕、再び子供たちに憎むことを教えました。こうして相対する二つの民に分かれる過程が再び始まりました。

どうぞわたしたちがこの重要な教訓を学び、人々を区別する名称を用いることがありませんように。使徒パウロは次のように教えています。『もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。』〔ガラテヤ 3:28。コロサイ 3:11 も参照〕

救い主は『御自分のもとに来て主の慈しみにあずかるように』わたしたちを招いておられます。『したがって主は、黒人も白人も、束縛された者も自由な者も、男も女も、主のもとに来る者を決して拒まれない。……すべての人が神にとって等しい存在なのである。』〔2 ニーファイ 26:33〕（“A More Excellent Hope,” *Ensign*, 1997年2月号, 63）

4 ニーファイ 1:42 - 46 秘密の誓いと結社

• 争いと秘密の業について、詳しくはヒラマン 1:1 - 21 の注解（250 ページ）およびヒラマン 1 - 2 章の注解（250 ページ）を参照する。

4 ニーファイ 1:46 イエスの弟子のほかには義人は一人もいなかった

• 4 ニーファイ 1:46 を読むと、イエスの十二弟子と 3 人のニーファイ人がニーファイ人の中に残った唯一の義にかなった人々であったという印象を受けるかもしれない。しかし、モルモンはこの点に関してアルマ 45:13 - 14 に重要な説明を残している。これらの節によると、モルモン書の終わりの

時代、「キリストに穏やかに従〔う者たち〕」(モロナイ 7:3) もまたイエスの弟子と呼ばれていた。

理解を深めるために

- もし 4 ニーファイの前半で述べられているような社会で暮らしたとしたら、あなたの生活はどのように変わるだろうか。自分の家族や家庭にこのような協調と平和が生まれるように、どのように助けることができるだろうか。
- 4 ニーファイの後半で、民は滅亡に至るパターンに陥っており、このパターンは二つの要素から成っている。一つは高慢であり(4 ニーファイ 1:24 - 43。3 ニーファイ 6:28 - 29 も参照)、もう一つは秘密結社である(4 ニーファ

イ 1:42 - 46。3 ニーファイ 6:28 - 29 も参照)。このパターンはエテル書にも出てくる(高慢についてはエテル 11:12 - 14, 秘密結社についてはエテル 13:15 を参照)。ニーファイ人が 200 年に及ぶ平和と繁栄の後に犯した過ちを、どうすれば避けることができるだろうか。

割り当ての提案

- 4 ニーファイでは争いと、争いをなくすことの重要性が強調されている。自分自身の生活の中で生じる争いの原因を見つけ、自分の生活の中で争いをなくすか、できるかぎり少なくするためにできることについて計画の概要をまとめる。